

【特別寄稿】

登倉尋實先生を偲んで ～ 被服生理学の先駆者と被服衛生学～

平田 耕造

被服衛生学部会元部会長、神戸女子大学家政学部

ご略歴



故 登倉尋實 奈良女子大学名誉教授
(写真提供：小柴朋子先生)

1939年3月11日生
1963年3月 北海道大学獣医学部卒業
1968年3月 同大学大学院博士課程修了
1969年5月 京都大学霊長類研究所助手
1974年9月 奈良女子大学家政学部助教授
1975年1月 農学博士号取得(名古屋大学)
1975年2月 西ドイツ・マックスプランク行動生理学研究所へ留学
1983年4月 奈良女子大学生活環境学部教授
2002年3月 奈良女子大学退職、名誉教授
2003年4月 香港理工大学客員教授
2013年5月 逝去 享年74歳

1. 被服衛生学の発展を願って

被服生理学の先駆者、登倉尋實先生は2013年5月にご逝去されました。享年74歳。本稿を執筆するにあたり、被服衛生学部会報(部会創立20周年記念号：1995年8月刊)を手にとってみました。巻頭言に登倉先生の被服衛生学の発展を願っての熱い思いが述べられています。「被服衛生学の目的は人体生理学を基礎にして、被服とヒトの関係を理解することにある。そして健康で快適な衣生活を国民に提案していくことである。」と明言され、被服衛生学の将来は、被服が健康の維持・増進に重要であることを証明する具体的な証拠を見出す研究が重要であるとの信念を示されています。部会活動では強いリーダーシップを発揮され、常に部会をリードされ先進的・挑戦的に進められました。その活動によって多くの部会員が強い学問的刺激を受け、生理学的な研究に足を踏み入れる契機となったのではないかと推察します。いくつか代表的なものを挙げてみたいと思います。

平成7年度～8年度には登倉先生が研究代表者となり科学研究費補助金の基盤研究A(1)を獲得され、「東アジア地域の高温多湿環境下における被服装着の最適化に関する学際的研究」を部会員中心に推進され、数多くの成果を247頁にのぼる分厚い報告書として平成9年3月に刊行されまし

た。この報告書は地球温暖化が進行する中、欧米中心の従来の被服学では解決しえない高温多湿環境における被服装着に関する初めての総合的な研究成果であり、国際的にも先駆的な意義を有しているものと評価されます。

平成7年8月25日には、ラフォーレ修善寺において「アジアの高温多湿地域における被服衛生学の問題」をテーマに第14回の被服衛生学セミナーを部会長として開催されました。これは科研共同研究のキックオフセミナーとなるものであり、先生の知人でもあるタイの先生方をお招きして、たいそう盛り上がった会になったことを思い出します。この研究で東南アジアの先生方との交流が深まり、登倉先生のご尽力でAsian Conference on Clothing Study Appropriate to Tropical Climate Conditionsへとつながりました。このConferenceへの参加研究者は、韓国、タイ、ベトナム、日本と回を重ねる度に徐々に多くの国から研究者が参加する会へと発展し、被服衛生学研究がアジアを中心にして国際的に発展する契機となっていきました。

平成9年3月には、東京・ホテルフロラシオン青山で「被服と人間の健康」と題した第1回の研究成果公開講座を科学研究費の補助金を得て実施されました。これは被服衛生学における研究成果

を広く市民に還元する公開講座であり、現在では多くの学会・研究会等でも実施しているものの走りでもありました。当時の登倉部会長は先見性をもって後に続く者に素晴らしい範を示してくださいました。その後も第2回は大阪で、第3回は名古屋と続きました。公開講座の活動は「衣服と健康の科学、最前線」という魅力的なコピーを生み出して本部会にしっかり定着しており、登倉先生が提案されている「健康で快適な衣生活を国民に提案していくこと」という被服衛生学の目的を具現化した活動の1つとなっています。

2. 科研課題からみた被服衛生学の研究

登倉先生の被服衛生学分野におけるご研究は人体生理学を基礎にして実施され、数々の成果を生み出してこられました。紙面の都合もあるので、先生の被服衛生学に関する膨大な研究成果のうち科研課題からその流れを概観してみたいと思います（文科省HPより）。

1) 1986～87年度（研究代表者：川端厚子）

暑熱・寒冷環境下の民族服の衣服気候に関する研究

2) 1989～91年度（登倉尋実）

特殊機能を付記した衣料品の表示および広告の実態とその着衣効果について

3) 1989～91年度（登倉尋実）

帽子着用時の暑熱炎天下および寒冷有風下の体温調節上の意義と作業効率に与える影響

4) 1989～91年度（長谷川喜代三）

生活環境学 - 衣・食・住の今日と未来 - に関する日中大学間協力研究

5) 1991～93年度（川端厚子）

靴の素材および構造がヒトの衣服内気候と運動能力の遂行に与える影響

6) 1993年度（登倉尋実）

衣服型がヒトの免疫能に与える影響

7) 1994～95年度（本間研一）

光の新しい中枢作用：視覚外中枢作用の特性と網膜・視交叉上核系神経機構

8) 1994～95年度（登倉尋実）

温熱および内分泌生理学の立場から見た寝具の快適性の評価

9) 1995年度（登倉尋実）

有害物質に対する密閉型保護衣の開発

10) 1996年度（松生 勝）

日本国奈良女子大学と中国西北紡織工学院との友好及び学術交流に関する協定-人間と生活環境に係わる日中大学間協力研究-

11) 1995～96年度（登倉尋実）

東アジア地域の高温多湿環境下における被服着装の最適化に関する学際的研究

12) 1996年度（林 千穂）

暑熱環境下の防護用被服の改善とフィールドでの適用

13) 1997年度（登倉尋実）

被服圧が唾液消化能力・心拍変動から見た自律神経機能に与える影響

14) 1997～2001年度（川端厚子）

電磁波がヒトの健康に与える影響の研究

15) 2000～01年度（林 千穂）

暑熱環境下の防護用マスクの改善とフィールドでの適用

以上のように登倉先生のご研究はとても幅広く、かつ挑戦的に取り組んでおられます。テーマは衣服（帽子/靴/防護衣/寝具など）、刺激環境（寒冷/暑熱/電磁波/衣服圧/光）、生理機能（免疫能/唾液消化能力/心拍変動/体温調節能/生物リズムなど）等を組み合わせて「生理学的なメカニズム」を明らかにする方向で、研究に邁進してこられました。これは被服衛生学の目的である「健康で快適な衣生活を国民に提案していくこと」を達成しようとの使命感から行われたものと推察いたします。

登倉先生は学会やセミナー等の会場で、作業衣を纏い、雪駄でペタペタ音をたてて歩かれています（世界的に有名）。会場では発表者に対して「どのような生理学的なメカニズムが考えられますか？」と、とても優しい眼差しで質問しておられたのはつい昨日のようです。

被服衛生学分野に生理学の基礎を導入され、非常にアクティブに学ぶ者を指導され、自らも学問をとっても高い次元で楽しまれて、努力を続けられた巨星・登倉尋実先生に心から深く感謝申し上げます。本当に有り難うございました。どうぞ安らかに眠りください。

<連絡先>

〒654-8585 神戸市須磨区東須磨青山 2-1

神戸女子大学家政学部 平田耕造

eメール： k-hirata@suma.kobe-wu.ac.jp